

位置

回転する花びら一枚
風の位置を正確に示す

性格が左斜め前方に傾斜して

斜面に沿つて滑空しだす

私は不憫でならない

もちろん今の私が

風が私の位置を示すから

くるくる回らなければいけない私が



illustration by Yosuke

ある私は

空中では
変身願望を果たした
私であつたはずの
鳶が
くるりと
輪を描いて
風に乗る

あるかもれない
深く考えることもなく
私は海岸を離れ

虹の終わりの痕跡を探す作業を
続けることとした

さすがに

私の本質である

高所恐怖症は

この事態に耐えられず

厚いレンズのめがね越しに

現実を否定してみる

ではない

ということで

私の属性のひとつに

過ぎないことになつてしまつた

ではない

かかつてこない電話

届かない手紙

電子メールの

伝える悪意も悪質だ

余すところなく伝わつてくる

悪意は電話でも

手紙でも電子メールでも

どんな伝達手段でも

そうです

私は私の変身願望のすえに

生まれた

仮象のひとつです

という肯定では

もちろん私は納得できず

啼きながら次の風を探す

季節の挨拶だつたけれど

カタチでだけれど

挨拶のカタチで

悪意は電話でも

手紙でも電子メールでも

どんな伝達手段でも

余すところなく伝わつてくる

かかつてこない電話

届かない手紙

電子メールの

伝える悪意も悪質だ

私は今朝の

電子メールに悪意を載せた

カタチは

季節の挨拶だつたけれど

届いた返事にも

悪意が込められていた

もちろん

季節の挨拶の

カタチでだけれど

痕跡

海の上を歩く男を見かけた
もうじき夏だから

そんなことも

あるかもしれない

深く考えることもなく

私は海岸を離れ

虹の終わりの痕跡を探す作業を
続けることとした

季刊 電話ボックス

4号

俳句のある詩・3

湖畔の宿で

白をもて一つ年とる浮鷗——森澄雄

深夜に目覚める

ひたひたという音に

波が岸にぶつかる音に

わたしは湖畔の宿にいるのだった

湖を渡つてくる風が葦原の葉たちをきわさわ鳴らし

部屋の硝子窓をかたかた鳴らす

夜のなかに白いものがひとつふたつ

見つめていると

闇にひき込まれそうだ

明かりを消して

夜の底に横たわつていると

湖の方でけものが吠える声がし

部屋のなかをなにものかが飛び交う気配がする

明かりをつけて

わたしは天井の染みをじっと見つめる

どこかへ行きたい

深夜の病棟に看護婦のかん高い声がひびく
どこへ行くの？

トイレ？

患者たちは答えることができない

どこへ行くのかわからないので

空港や鉄道駅やバス・ターミナルに群がる無数のひとびと

あるいはどこだかわからない土地へ

ひとはいつもどこかへ行きたいのだ

ここではないどこかへ

わたしはいろんな土地へ行つた

外国へも行つた

子どものころからずっとどこかへ行きたかったので

でもそこはいつもわたしの行きたい所ではなかつた

深夜の病棟に看護婦のかん高い声がひびく

どこへ行くの？

トイレ？

お家？

それとも……

ホーホーおばさん

ホーホーおばさんのホーホーという声を子守歌にして育つたぼく
だけど、初めてホーホーおばさんと会つたのは小学校の一年生の
ときだつた。おばさんは（木ではなく）ジヤングルジムの天辺に
腰かけて遠くを見ていた。女学校の制服で。足元にはもう一人の
おばさんが静かな森のようにたたずんでいた。

*

大阪、門司、東京、横浜、新潟、千葉、相模原とぼくらはたえず
転居をくり返したけれども、さびしい思いをしたことはなかつた。
どこへ移つても、ホーホーおばさんのホーホーという声がついて
きたので。影のように。

*

ホーホーおばさんのホーホーという声は遠くからもよくひびいた。
高く低く。そして、ホーホーおばさんのホーホーという声をきいた
ひとはだれでも生涯忘れられない声だといった。魂の底までひ
びく声だと。ぼくらはいつもバックグラウンド・ミュージックの
ように聞き流していたけれども。

*

ホーホーおばさんのホーホーという声が途絶えたときは、ぼくら
はどうしていいかわからなかつた。世界が滅んだときのように
(ホーホーおばさんは首に葱を巻いて寝ていたんだってさ)。
外国で暮らしたときは、ホーホーおばさんのホーホーという声が
きけなくてさびしい思いがした。夜ごと夜ごと、ぼくはアパート
メントの固いベッドの上で裏の森の梟のホーホーという声に耳を
傾げてすごした。

*

ぼくらはいつの間にかホーホーおばさんの顔や姿を思い出せなく
なつた。半世紀も会つていなかつたので。でも、ぼくらはさびし
いとは思わなかつた。ホーホーおばさんのホーホーという声がい
つもぼくらの身辺にエーテルのように漂つていた。ホーホーおば
さんとはホーホーという声のことだつたから。

*

ぼくがいなくなつたあとも、ホーホーおばさんのホーホーという
声が世界の隅々にまでひびいてほしい。木靈のように。そして、
さびしい魂たちにささやきつづけてほしい。あたしはいつも一緒
よ、と。

中上 哲夫

2005年 4月30日刊

発行人

中上哲夫 〒179-0081 東京都練馬区北町1-44-3-313

淵上熊太郎 〒414-0002 静岡県伊東市湯川522-1